ノーサイド

北原巖男

あるドキュメンタリー映画

自衛隊員・ご家族の皆さん、そして本紙読者の皆さんには、これまでも様々なドキュメンタリー映画をご覧になっておられることと思います。画面に映し出される真実が持つ凄み。作り話ではありません。

取り返しのつかない残酷さと悲痛の叫びや涙に怒りや胸を痛め。或いは歓喜の声や満面の笑顔、笑顔に胸を躍らせ喜びを共有。その都度、そんな自分自身を映画館の観客席にて体感されて来ておられるのではないでしょうか。

ところで、日々ニュースで報じられているイランやガザ。一日も早く事態が収束し、戦禍の下で傷つき逃げ惑っている人々に、平和で安心して暮らせる日常が回復することを願わずにはいられません。

注目されるのは、イスラエルのネタニヤフ首相の強硬な姿勢です。テレビでは中東問題の専門家や大学の先生などが、種々解説や今後の見通し等を披歴されていますが、筆者には良く分かりません。

そうした中、「THE BIBI FILES（ネタニヤフ調書　汚職と戦争）」（製作総指揮：アレックス・ギブニー、監督：アレクシス・ブルーム）というタイトルのドキュメンタリー映画が上映されていることを知りました。BIBIとは、ベンヤミン・ネタニヤフ（Benjamin Netanyahu）首相の略称であり、彼は、「KING BIBI」等のニッネームも有するとのこと。

報道によれば、同映画は、詐欺や背任・贈収賄等で首相在任中の現在訴追されているネタニヤフ首相や、奥様をはじめ幾多の関係者に対する警察の尋問の様子などが克明に記録されており、イスラエル国内では、上映が禁止されている由。

筆者が観た都内の小さな映画館は、平日ということもあり、30名程度の観客でした。しかし、一見して、老若男女を問わず様々な世代の皆さんが関心を抱いているように感じました。

映画の受け止め方は、正に千差万別と思います。

まず、警察の尋問映像がこのような形で公開されること自体に大変な驚きを禁じ得ませんでした。

そして、映画の中でネタニヤフ首相が何度もおっしゃっている「知らない」「記憶にない」「でたらめだ」「嘘だ」「問題ない」等の発言や、「私は、国益第一」「安全保障に係る問題だ。個人の問題ではない」等の発言、更には、自ら口にされた映画「ゴッドファーザー」のセリフ「友は近くに置け、敵はもっと近くに置け（Keep your friends close, but your enemies closer.）」の考え方などに触れるとき、筆者は、現職の首相がイスラエル史上初めて訴追をされるに至っている背景や極右政党との連立政権発足の背景等の、ごく一端を垣間見たような思いをしながら映画館を出ました。

裁判はガザやイラン情勢のため幾度か延期され、現在も継続中です。何らの判決も出ていない現時点で、軽々な発言は厳に慎まなければなりません。

映画館で入手したプログラムには、ブルーム監督とギブニー製作総指揮者の次のようなやり取りが掲載されていました。

ブルーム監督「1995年にユダヤ人過激派がラビンを暗殺し、その後ネタニヤフが首相になりました。ですから、もともと無欠の指導者だったわけではなく、〝不安の種〟は常にあったのです。しかし2015年に彼が予想外の大勝を収めた後、自分を〝選ばれし者〟だと信じるようになった・・・と多くの人が言います。私も驚きました」

ギブニー製作総指揮者「これは多くの権威主義者に共通する現象です。自分が作り出した虚構を信じ込み、事実よりも伝説を選んでしまうのです」

大切な指摘だと思います。

北原　巖男（きたはらいわお）　元防衛施設庁長官。元東ティモール大使。現日本東ティモール協会会長。（公社）隊友会理事